

May 28th, 2023
2023年、5月、28日

Seeing Jesus Week 7: The Kingdoms of Heaven イエスに会う週第7: 天国の王国

序章: 裁判中のイエス

ルカは、イエスの物語を語るために提示された目撃証言のコレクションを私たちに与えています。

今週と来週は、イエスの生涯の終わりにおける出会いについて見ていきます。ジェイミー牧師は来週磔刑について話す予定ですが、今日はイエスを磔刑に導いた偽の裁判について見ていきます。イエスの処刑の数時間前、イエスはこの地域で最も権力のある二人、ガリラヤ四分主ヘロデとユダヤ総督ピラト、そしてこの地域で最も有力な宗教団体であるサンヘドリンとユダヤ高等派の前で裁判を受けることになる。祭司。

裁判がニュースの一面を飾ることもあります(ブラウン対教育委員会、ロー対ウェイド、ジーマーマン、リッテンハウス、1月6日など)。全員の目がその光景に釘付けになります。次は何が起こるのだろうか? 誰が起訴されるのでしょうか? 事件を変えるためにさらに重要な証拠が現れるのでしょうか? 彼らが有罪となればどうなるのでしょうか? 無罪になったらどうなるのでしょうか? この事件は私たちの将来に何を意味するのでしょうか?

この裁判は何週間も続くのではなく、1日もかからないでしょう。それでも、誰もがこのことについて話し合うだろうということはわかっています。復活祭の話を覚えているなら、エマオへ向かう途中の弟子の一人のセリフがあります。「ここで起こっていることを知らないのは[イエスと話している]あなただけです...イエスについて」ナザレの?」

1世紀のエルサレムに「話題になる」ということがあったとしたら、この話はトレンド1位になっていました。ローマは多くの人々を磔刑で処刑しましたが、イエスに起こったことは違いました。明らかに。それは重要なことなので、街中のすべての目と耳がそれに向けられました。ほとんどの歴史家は、過ぎ越しの祭りに20万人から100万人が市内にいたと推定しています。ルークが自分の話を裏付けるには、たくさん目撃者がいるのです! エルサレムの街は継ぎ目で破裂し、これらすべての人々のための場所を作るために一時的に城壁の外に拡張するでしょう。

エルサレムでは過ぎ越しの祭りが激動の時期でした。過越の祭りは、神がイスラエルをエジプトの圧制から救い出したときでした。外国の抑圧からの解放を記念するものです。あなたがローマなら、抑圧された帝国からの抑圧された人々の解放を祝う休日。

トランジション 1: 今日はイエスの裁判を調べます。私たちは、この世界の帝国の代表者たちと、すべての正当な王であるイエスとの間の驚くべき対決を見ることになるでしょう。

聖書のルカ 23 章...

MVMT 1: 「永遠」のローマ王国 (Luke 23:1)

“群衆はみな立ちあがって、イエスをピラトのところへ連れて行った。”

ルカによる福音書 23:1 口語訳

なぜイエスはユダヤ人の宗教指導者と帝国の両方にとってこれほどの脅威なのでしょう。
ローマ？

本文を読み続ける前に、これらの重要な質問に答えなければなりません。

思い出します... 私たちが聖書を読んで研究するとき、重要な力関係があります。私たちが最初に尋ねる質問の 1 つは、「それは彼らにとってどういう意味がありましたか？」というものです。その質問に答えることができたなら、「これは私たちにとって何を意味しますか？」と尋ね始めることができます。その順番で。

今日、私たちが聖書を解釈し適用する際に、ここで行き着くことがよくあります。

このシリーズは、これらの目撃証言を調査し、この経験をした人々にとってこれは何を意味するのかという質問をすることです。これは当時の人々(名もなき群衆やこの物語の聞き手)に何を示唆したのでしょうか？

これらの質問に答えると、彼らの文脈と私たちの文脈の間のギャップを埋めることができます。

ローマの超大国

ローマは世界的な超大国でした。それは、エジプト、アッシリア、ペルシア、バビロニア、ギリシャなど、他の多くの世界帝国の後に続きました。歴史を勉強している人なら、帝国が興亡することを知っているでしょう(多くの場合、すべて同じいくつかの理由で)。

ローマは永遠の帝国であると考えられていました。ラテン語のフレーズがありました - Imperium sine Fine (文字通り、「終わりのない帝国」)。この言葉は、時間も空間もローマ帝国を制限することはできないというイデオロギーを表現しました。これは決して崩壊しない帝国であると考えられています。ローマは彼らの主神であるジュピターによって創設されたと信じられていたため、ローマには世界を征服する神聖な権利があったと考えられていました。

その範囲は天文学的でした。

これらは居住可能で肥沃な土地です。天然資源が豊富で、貿易の機会も豊富です。他の帝国と同様に、この土地も征服されました。人々は従属し、そこでは戦争が行われました。ローマが勝利した。

ローマがこの規模の帝国に統合される前に、100 年に及ぶ流血の 1 世紀にわたる内戦を経験しました。その後、オクタヴィアヌスまたはシーザー・アグストゥス(後に戴冠)は、すべてのライバルを排除し権力を強化することで、最終的に百年戦争を終わらせました。

100年にわたる内戦を経験したことを想像してみてください。それは、戦争の絶え間ない脅威以外何も知らなかった複数の世代です。

内戦中、ユダヤ人はローマの右派(最終的に勝利する派)の側につき、帝国内で特別な特権を与えられました。彼らは礼拝、犠牲、安息日、帝国崇拝を控えること、宗教法を強制すること、さらには独自の「傀儡の王」(後で彼に会います、彼の名前はヘロデです)を置くことさえ許されるでしょう。この勝利した側は最終的にアウグストゥスの統治下に従うことになります。彼らはカードを正しく使いました。

アウグストゥスは内戦を終わらせ、人々は歓喜しました。彼らは自分たちのシーザーが「世界の救世主」であると主張した。ウェルギリウスやホラティウスのような詩人は、この王がまったく新しい時代、「若々しいサトゥルニア・レグナ」の到来を告げたと宣言した。言い換えれば、2世紀で初めて、軍の神が彼らの神殿の扉を閉ざし、ローマの新時代が到来したのだ。平和が始まった。アウグストゥスの時代はパックス・ローマナ、つまりローマの平和の時代の始まりでした。ホラティウスは、アウグストゥスが「アンキセスとヴィーナスの息子」、つまり神々の息子であると歌いました。

彼の時代には...アウグストゥスは...と考えられていました。

世界の救世主

神々の息子

彼の王権は、永遠のローマ帝国のローマ平和の新時代の到来を示しました。

つまり、神の子である世界の救世主が到来したので、天の国が到来したのです。そして彼の王国はまったく新しい平和の時代をもたらしました。

おなじみですね？

なぜイエスがローマにとってそれほど脅威なのかと私が尋ねたときのことを覚えていますか？これは驚くべき方法で復活するので覚えておいてください。

これらすべてが、今日私たちが読んでいる物語に文脈を与えます。

なぜイエスが宗教組織にとってそれほど脅威となったのかについて話しましょう。

1 節に戻って「集会全体」と読むと、ローマの統治下で機能することを許可された宗教支配階級のことを指します。彼らは、独自の私設軍隊を保有し、法律に基づいて刑罰を執行することが認められていましたが、1 つの例外を除き、死刑を執行することはできませんでした。

宗教的暴力

宗教指導者たちはしばらくの間、イエスに対して不満を表明してきた。

自国の権力に対する脅威を排除するための彼らの戦略は、ローマに死刑を実行させるような冤罪をでっち上げることだ。

彼らもまたローマを軽蔑し、王が内部から立ち上がってローマを破壊し、新たな平和の時代をもたらすことを切望していたのですから、これは皮肉なことです。

共通点に気づきましたか？彼らが使用する手段にも注目してください。

それらは異なる種類の王国を表現するのに役立つと考えられています。代わりに、彼らは宗教的な装いでローマを模倣します。

偽りの宗教裁判で、イエスはダニエル7章を引用して、自分が人の子であると主張します。その預言の成就。イエスは裁判を受けていますが、嘘はつきません。彼はできない。

裁判中、彼が話すと彼らは激怒する。

“彼らは言った、「では、あなたは神の子なのか」。イエスは言われた、「あなたがたの言うとおりである」。すると彼らは言った、「これ以上、なんの証拠があるか。われわれは直接彼の口から聞いたのだから」。”

ルカによる福音書 22:70-71 口語訳

それは冒涇です - イエスは神であると主張しています。

彼らにとって...冒涇者は死に値する。

「宗教の歴史において、人々は命の神の名の下に人を殺し、平和の神の名の下に戦争をし、愛の神の名の下に憎まれ、神の名の下に残虐行為を行ってきた。慈悲の神。これが起こると、神は時には、神の代理として話していると主張する人々の喧騒の下でほとんど聞こえないほどの静かな小さな声で語られます。そんなときに彼が言うのは、「私の名前ではない」ということです。

-ラビ・ジョナサン・サックス、神の名においてではない

変遷: 宗教指導者たちはローマのやり方を受け入れ、人々が導くべき神の道を放棄しました。

MVMT 2: イエスの裁判 (Luke 23:2-12)

ヨハネの福音書によれば、宗教指導者たちは儀式の純粋さを気にするあまり、ピラトの空間に立ち入ろうとはしません。

皮肉なことを考えてみましょう。

DAカーソンは、「ユダヤ人の指導者たちは、真の過越祭であるユダヤ人の死を確実にするために司法制度を操作することに忙しい一方で、儀式的な過越祭の食事を食べることができるよう、儀式的に汚れないように細心の注意を払っている」と述べている。

彼らは宗教の外側の要素を優先し、正義、慈悲、恵み、愛といったより重要な内側の現実を無視します。

宗教の運動は、私たちを神のより深く、より重いものに近づけるはずですが、神の代わりとしてではありません。

宗教に熱中してイエスを恋しく思うことはあり得ます。

現在これをどのように行っているかの例

そしてそれがここで起こっていることです。2節

“そして訴え出て言った、「わたしたちは、この人が国民を惑わし、貢をカイザルに納めることを禁じ、また自分こそ王なるキリストだと、となえているところを目撃しました」。”

ルカによる福音書 23:2 口語訳

これらは3つのでっち上げられた容疑です。

彼はシーザーに税金を払わないようにとは決して教えませんでした、全く逆です(シーザーをシーザー、神を神とみなしてください)。

彼は国家を転覆させるような暴力的な行為は決してしませんでした。

そして、イエスは王権を主張しましたが、彼らは半分真実を語っているのです。そして半分の真実は嘘です。彼らは彼をシーザーの物理的なライバルとして提示します。

ローマの総督には3つの仕事がありました。あらゆる犠牲を払って平和を維持すること、ローマ法の管理、税金を徴収することです。

ユダヤ人の指導者たちはこのことを知っており、行動を強制しようとしている。ピラトは最初は餌に乗りませんでした。

“ピラトはイエスに尋ねた、「あなたがユダヤ人の王であるか」。イエスは「そのとおりである」とお答えになった。そこでピラトは祭司長たちと群衆とにむかって言った、「わたしはこの人になんの罪もみとめない」。ところが彼らは、ますます言いつのってやまなかった、「彼は、ガリラヤからはじめてこの所

まで、ユダヤ全国にわたって教え、民衆を煽動しているのです」。ピラトはこれを聞いて、この人はガリラヤ人かと尋ね、”

ルカによる福音書 23:3-6 口語訳

ヘロデはローマ統治下のユダヤ人の傀儡王であることを思い出してください。彼は洗礼者ヨハネの首を切り、自分も神であると主張しているため、使徒行伝の中で突然死ぬことになる狂った男でもあります。

ピラトは、イエスには何の罪もないことを明らかにしています。彼は無実です。しかし、彼は責任を負いません。

イエスに会ったときの彼の反応は、臆病で無関心です。

それは彼の地位と権力を維持したいという願望に集中しています。それは正しいことをするよりも重要です。

“ヘロデはイエスを見て非常に喜んだ。それは、かねてイエスのことを聞いていたので、会って見たいと長いあいだ思っていたし、またイエスが何か奇跡を行うのを見たいと望んでいたからである。それで、いろいろと質問を試みたが、イエスは何もお答えにならなかった。祭司長たちと律法学者たちとは立って、激しい語調でイエスを訴えた。またヘロデはその兵卒どもと一緒に、イエスを侮辱したり嘲弄したりしたあげく、はなやかな着物を着せてピラトへ送りかえた。ヘロデとピラトとは以前は互に敵視していたが、この日に親しい仲になった。”

ルカによる福音書 23:8-12 口語訳

無関心

卑怯者 (代償を払うかもしれない) 嘲笑

復讐

暴力

裁判中、これはイエスを見た人々の反応であり、今日でも多くの反応が残っています。

次へ: イエスはそのような暗闇にどのように反応しますか?

MVMT 3: イエスの永遠の王国 (John 18:36-40)

ヨハネの福音書は、この重要な試練についても一つ垣間見せてくれます。ヨハネ 18 章 36 節以降をご覧ください。

イエスは対照的な天の王国を提供しています。

ピラトは彼に彼が王なのかどうか尋ねます。イエスはこう答えます。

“イエスは答えられた、「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」。そこでピラトはイエスに言った、「それでは、あなたは王なのだ」。イエスは答えられた、「あなたの言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生れ、また、そのためにこの世にきたのである。だれでも真理につく者は、わたしの声に耳を傾ける」ピラトはイエスに言った、「真理とは何か」。こう言って、彼はまたユダヤ人の所に行き、彼らに言った、「わたしには、この人になんの罪も見いだせない。過越の時には、わたしがあなたがたのために、ひとりの人を許してやるのが、あなたがたのしきたりになっている。ついては、あ

なたがたは、このユダヤ人の王を許してもらいたいのか」。すると彼らは、また叫んで「その人ではなく、バラバを」と言った。このバラバは強盗であった。”

ヨハネによる福音書 18:36-40 口語訳

イエスは自分が真理の源であると主張します。

帝国はためらいます。彼らは物語をコントロールします。何が真実で、何が真実ではないのか？それは彼ら次第です。

イエスは帝国の力を超えた何かがあると言います。

真実は死に直面しても勝ちます。ピラトは依然としてイエスの無罪を宣言しています。

これは重要。宗教指導者たちがイエスが有罪であると誤って主張しているにもかかわらず、ピラトとヘロデはイエスの無罪を宣言します。

過越の祭りには囚人を釈放する習慣がありました。これはローマの平和を維持するための政治的行動だったと考えられています。

バラバは反乱主義者でした。彼はローマに対する物理的な反乱の指導に加担しており、その犯罪に対する死刑を待っていた。イエスとは異なり、彼の告発は本物です。彼は無実ではなかった。

この裁判の間中、バラバはアントニアの塔の内部の厳重な警備の独房に監禁されていた。この場所からは、刑務所の外で何が起きているかの一部しか聞こえなかったでしょう。マタイ 27:21-25 は、彼が聞いたかもしれないことについて役立つ視点を与えてくれます。

■ピラト:「ふたりのうち、どちらをゆるしてほしいのか」v.21

■群集:「バラバの方を」v.21

■ピラト:「それではキリストいわれるイエスは、どうしたらよいか。」

■群集:「十字架につけよ」(v. 22)

■ピラト:「あの人は、いたい、どんな悪事をしたのか。」(v. 23)

■群集:「十字架につけよ」(v. 23)

■ピラト:「この人の血について、わたしには責任がない。おまえたちが自分で始末をするがよい」(v. 24)

■群集:「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」(v. 25)

バラバには、刑務所から離れた中庭に向かって話すピラトの孤独な声が聞こえなかったと考えて間違いありません。また、大勢の群衆が大声で叫んでいたことを彼が聞いたと考えるのが安全です。これを念頭に置くと、バラバはこうしか聞こえなかったでしょう。「バラバ...彼を十字架につけろ！ ...彼を十字架につけろ！ ...彼の血が私たちと私たちの子供たちに降り注ぎますように！」

これらの不気味な言葉を聞いたときに彼が感じたであろう悪寒、恐怖、そして冷や汗を想像してみてください。聞いた話からすると、彼は自分の処刑が近いと思っただろう。しばらくして、警備員が錠を開けようと独房に近づいたとき、彼が何を感じたか想像できるだろう。しかし、自分が解放されることを知ったときの突然の衝撃と高揚感を想像してみてください。別の人、つまりイエスという名前の人、彼の代わりに死ななければなりません。あの日、有罪判決を受けて釈放された犯罪者が刑務所から立ち去るとき、どんな感情を感じたであろうか想像できますか？

バラバは、イエス・キリストが彼の肉体の代わりになったと言える世界で唯一の人でした。しかし、イエス・キリストが私たちの霊的な地位を占めたと言えるでしょう。

パウロはそれを次のように説明しています。「神は、私たちが神の義となるために、罪のない方を私たちの代わりに罪とされました。」(2コリント5:21)。ペテロはこう言いました、「イエスご自身が、私た

ちの罪をその体において木の上で負ってくださったのです。それは、私たちが罪に対して死に、義のために生きるためでした。彼の受けた傷によって、あなたがたはいやされたのです」(1ペテロ2:24)。
トランジション:「イエスにイエス」と言うということは、彼の王国に入るということです。

回答: どの王国に従いますか?

二人の王と二つの王国が衝突する。天国から来たと主張するもの。もう一つは実際にそうです。
彼らの美德と価値観は衝突します。

人は暴力、権力、恐怖によって支配し、コントロールしようとします。

もう一方は、自己犠牲的な愛、恵み、許しを通して団結し、癒そうとします。

どれを選びますか?

イエスの王国での生活とこの世の王国の例

祈りの歌

祝祷